

F. Scott Fitzgeraldの短編にみられる 色彩表現について (Ⅳ)

小林 資 忠

(英米文学研究室)

[1]

本論では、前稿¹⁾に引き続いてMalcolm Cowleyが1951年に編集した短編集*The Stories of F. Scott Fitzgerald*から、‘Magnetism’(1928), ‘The Last of the Belles’(1929), ‘The Rough Crossing’(1929), ‘The Bridal Party’(1930), ‘Two Wrongs’(1930)を取り上げ、色彩表現に注目してそれらの作品の内容を検討してみよう。テキストはCowley版を用い、引用の最後の()の中にページ数を示す。

‘Magnetism’では30歳の人気俳優²⁾である主人公George Hannaford³⁾が登場する。物語は彼を取り巻く4人の女性と彼との遣り取りで進展する。⁴⁾その1人は彼の家のお手伝いをしているメキシコ娘のDoloresである。主人であるGeorgeと浮気をしたいと内心は思っているが、片思いのまま毎日の仕事に専念している。Georgeの妻Kayも俳優であり、生後2ヵ月の赤ん坊の息子が1人いる。俳優同志の結婚は当時としても、しばしば離婚に至ることが多かったのだが、彼等の場合はお互いの努力によってそれを克服していた。Kayは西部のある州から選出された上院議員の娘で、12歳の時にはもう男にちやほやされており、17歳の時に家を飛び出して芸能界に入っていた。ある時映画界に関係し、Georgeと知り合い、彼の中に自分の求めているものを見出すことになる。赤ん坊はイギリス人の乳母の所有物ようになっており、Kayは世話をすることもできず暇な毎日を送っていたが、鋭い女性の直感によって、GeorgeがHelen Averyという彼と共演している18歳のブルーネットの美しい娘に関心を持っていることを偶然に知り、Georgeと口論になる。GeorgeはHelenが初めて出演した映画を見た時に、自分の相手役にしたいと思った娘で、この2週間ばかり彼女に心を引かれていたが、それもステージの上のことだけで、今はその気持も消えかかっていた。もっとも、Helenの方はその後何度となくGeorgeに電話をしていたが、恋愛には発展していかなかった。

一方、Kayにも彼女のことをずっと恋しているArthur Buschという最近台本作家から映画監督になった小柄な醜男ぶおとこがいた。ある新築祝いのパーティーで、ハイボールを飲み、いい気分になったKayがArthurと親密そうに手を握り合って互いにじっと見詰め合っているのをGeorgeが目撃した時には彼も驚くが、翌日Kayが「ハイボールのせいで、Arthurのことがちょっと気の毒になっただけよ」と言うのを聞いて、彼ももうそれ以上考えないことに決めた。もう1人の女性

はGeorgeの友人であり、映画撮影現場で記録を取る係をしているMargaret Donovanであった。色白の美人で、Georgeは彼女がなぜ女優にならないのかと、何度となく思った女性であり、Georgeが結婚する前の年、一時的に彼女にのぼせて、家へ帰る途中、車の中で彼女にキスをしたこともあった。その彼女と刑務所から出たばかりの彼女の弟が共謀して、Georgeから貰ったと称するMargaret宛の手紙と引き換えに5万ドルを脅し取ろうとする事件が持ち上がる。その手紙は、Margaret自身がタイプライターで打ったラブレターで、うまくだましてGeorgeに署名させたものであった。彼はさっそくその本心確かめるために、Margaretの安アパートまで出かけて行く。Margaretは自分と弟で話をでっちあげ、自分の分け前が手にはいれば、それで中国に行くつもりだったと言う。彼女はGeorgeとの恋愛だったら本当らしく見えると思ったと白状するのである。さらに彼が映画界入りしたその時から、今までずっと彼を愛し続けてきたことを述懐もする。彼には人を引き付けて離さない魅力があり、それに引き付けられた人は身動きできず、どこにも行けなくなってしまおうと彼女は話を続けた。彼女は机から例の手紙を取り出し、細かく引きちぎり紙屑かごに投げ捨てて涙に暮れる。「お願いだから帰って!」という彼女の言葉にGeorgeも戸口から出て行かざるを得なくなった。帰宅後、彼はKayとMargaretのことについて話をしていて、気になったことがあったので彼女に電話してみると、交換手が出てMargaretが自殺をし、病院に運ばれ、一命はとりとめたが体の中の弾丸を今探しているところのようです、との説明がなされる。物語はGeorgeが責任を感じてその病院にすぐさま直行するところで終る。

この短編ではwhiteは明るさと結び付き、映画撮影をしているスタジオの薄明かりの中で、ところどころに人がいるその顔を“white faces”(223)と描写するのに使用されている。ステージの明るい光が一部漏れて、回りの人々の顔を明るく照らしている状況である。もちろんステージは“the white crackling glow”(223)で満たされている。一方、この色彩は青ざめた顔色も表し、気分がよくないことや不愉快な様子を示唆する。

(1) . . . Arthur Busch's ugly face in the sunshine was wan and white; . . . (233)

BlueはGeorge宅の乳母が身に着けているケープの色に現れるが、“wear the blue”(召使いとなって尽す)と関連して奉仕の概念と結び付いているのかもしれない。もう1例はステージの眩しい光の中に監督らしき人の顔が“a blue face”(224)として現れ、上の方の暗闇に向かって叫び、何か文句を言っている場面に用いられており、不満があって憂うつな様子がその顔に感じられる。

Pinkは俳優の1人が身に着けているきらきら輝くワイシャツの胸当ての色として現れ、「おしゅれ」を暗示すると共に、Margaretが住んでいる安アパートのひどい外観を示す色としても使用されている。GeorgeはかつてKayと結婚する前にこのMargaretのアパートに来たことがあったが、その時はこの色彩も希望の色として楽しい浮き浮きとした気持を表していたのであろう。しかし、今来てみるとこの色彩は彼女が行なった裏切りの行為と重なり合って、安物の不快な建物を彩るものになっているのである。もっともMargaretのGeorgeに対する片思いの気持は今でもずっと持続しており、彼女の心に秘めた壊れた愛が、この色彩のさびれた安アパートに具現されているとも考えられる。

(2) . . . he passed an apartment house that jolted his memory. It was on the

outskirts of town, a pink horror built to represent something, somewhere, so cheaply and sketchily that whatever it copied the architect must have long since forgotten. And suddenly George remembered that he had once called for Margaret Donovan here the night of a Mayfair dance. (234)

GreenはGeorgeの家がある大通りの両側の芝生の色として現れるほかに、Georgeが夜明け前、たまたま起きてきたKayといっしょに自分の庭にいた時、そばの川でゆっくりと動いて行く船の明かりを見るが、その色としてyellowと共に用いられている。Georgeが妻KayとArthurの関係を、Kayが夫GeorgeとHelenの関係をそれぞれ嫉妬している気持ちがゆらゆら揺れながら動いて行く船の明かりに投影されている。この場合のyellowにもお互いのねたみの気持ちが含まれていると考えてよいだろう。

(3) There was a river that flowed past it now, and boats faintly lit with green and yellow lights moved slowly, remotely by. A gentle starlight fell like rain upon the dark, sleeping face of the world, upon the black mysterious bosoms of the trees, the tranquil gleaming water and the farther shore. (230)

Blackは上の場面で木々の黒さを表すのに使用され、お互いの心が信じられないGeorgeとKayの間の悲哀が感じられる。

Goldenは“a golden haze of success”(227)として成功や繁栄と関係しながら、輝かしい状況を表し、映画界のかつての黄金時代を彷彿とさせる。

BrownはHelenのストッキングをはいていない素足と結び付き、しよせんGeorgeとの愛は育てていけない彼女の悲しみ、心の不毛性を暗示しているようだ。

Redは芝生で遊んでいる子供たちの膝にみられるマーキュロクロームの色として用いられている。

女性を引き付ける魅力を持った俳優Georgeの登場によって、当時の映画俳優の生活の一端を垣間見ることができる。⁵⁾

この短編における色彩語の頻度は次のようになっている。

white 5/ blue 2/ pink 2/ green 2/ yellow 1/ golden 1/ black 1/ brown 1/ red 1

[2]

‘The Last of the Belles’⁶⁾では主人公は語り手であると同時に三人称の登場人物Andyとして現れ、*Gatsby*と同じく物語に客観性を持たせる手法が採用されている。南部Georgia州の町Tarletonが舞台になっており、今から15年前、そこに駐屯していた部隊に所属していた23歳のAndyは、同じHarvard大学出身のBill Knowlesと出会って、BillがTexasに出発する前に、今付き合っている19歳の美人Ailie Calhoun⁷⁾を紹介される。Billが出発したあと、AndyはAilieとカントリークラブや各種のパーティーに出かけたが、彼女はAndyのことを恋人というよりも親友とみなしていた。また彼女は他の娘たちとは違って北部に関心を持ち、南部の男性には興味を抱いていない様子だった。ある日Billが休暇を取って帰って来てAilieと仲良くしているのを

見て、Andyは羨ましきのあまり悲しい気分になる経験をする。AndyもAilieに魅惑されつつあったのである。彼女の回りには多くの男性が群がり、その中の1人に航空士官のCanby中尉がいた。彼はAilieに夢中であったが、飛行機事故で即死してしまい、Ailieの涙を誘う。

まもなくAndyの中隊にMassachusetts州の田舎町New Bedford出身のEarl Schoen⁸⁾中尉という、かつて市電の車掌⁹⁾もしたことがある筋骨たくましい体をした男が編入されてきた。彼は1週間もたたないうちに、Tarletonの町の娘Kitty Prestonと仲良くなる。しかしKittyといしょにいるにもかかわらず、彼はAndyとAilieがいるところをプールで見掛け、近寄ってきて勝手に話し始め、Ailieの美しさに引き付けられてしまう。その後もEarlは機会を見つけてはAilieに付きまとい、何かと気を引こうとするが、彼女の方はあまり気がない様子であった。しかし彼女も自分のことを崇拜してくれるので、まんざらでもない気持を抱いていた。やがてAndyはフランスに出発するようという命令を受けるが、Long Islandで乗船するのを待ちながら一カ月を過す間に戦争は終ってしまう。¹⁰⁾ Tarletonの町の基地も姿を消しつつあり、カントリークラブのダンスパーティーにやって来る軍服姿の将校も少なくなっていく。クリスマスの直前にBillが思いがけなくこの町に戻って来たが、次の日にはAilieとの仲がうまくいかなかったのか、町を去って行った。EarlもAilieに言い寄っていたが、彼女の世界にはそれなりの条件が必要であり、¹¹⁾ 金持の男でないと彼女とうまくやっていけないのを自覚し、彼女の許を離れAndyと共に北部に向かう列車に乗る。

以来6年間Andyは北部で過ごしAilieとも会わなかったが、Indiana州のある駅で1人の女性を見た時、過去の思い出がよみがえり、¹²⁾ ふと南部¹³⁾に行ってみようと思い立ち、Ailieに電報を打ちTarletonに向かう。彼女に会ってみて、Andyは彼女を深く愛しているのに気付いてプロポーズをするが、彼女の方から愛していないと言われ、¹⁴⁾ さらに来月ある男性と結婚する予定のあることも聞かされる。仕方なく最後の願いとして、彼は自分がかつていた基地のあった所までいっしょにタクシーで同伴してくれるように彼女に依頼をする。その場所に着いてみると、昔の面影はなく、¹⁵⁾ あれほど生き生きと活動していた基地は初めから存在していなかったように見え、彼はただ空虚さだけを感じるのである。¹⁶⁾

この短編で最も多用されているwhiteはAilie Calhounと密接に関係している。この色彩はAndyが初めてCalhoun邸へBillといっしょに行った時にAilieが着ていたドレスの色に、またCalhoun邸の南部風の柱の色に現れて、上品さ、高貴さを表したり、Ailieの鼻に塗られた多量の粉おしろいの色として用いられている。さらに月光に照らされて明るさを増した道もwhiteで修飾されている。

- (4) We (= Ailie, Earl, Sally and I) drove through pine woods heavy with lichen and Spanish moss, and between the fallow cotton fields along a road white as the rim of the world. (248)

PinkはEarl Schoenが散髪屋に行つて剃り上げてもらったえり首の健康そうな肌の色として使用されると共に、Andyが6年間会っていなかったAilieに会いたいと思う動機となった、Indiana州のとある駅で偶然に出会った1人の女性のドレスの色としても現れている。彼はこの色彩に女らしさ、青春(の喜び)を発見し、かつて抱いたAilieに対する恋愛の気持がよみがえって来た

のである。このことはこの出来事のあと、すぐさま彼が彼女の許に出掛けて行くことでもわかる。

- (5) Oddly enough, a girl seen at twilight in a small Indiana station started me thinking about going South. The girl, in stiff pink organdie, threw her arms about a man who got off our train and hurried him to a waiting car, and I felt a sort of pang. (251)

BlueはEarlの言葉の中に現れる。AilieのことをあきらめたEarlがAndyと共に北部に向かう列車に乗った時、隣の車両にかわいい女の子が2人きりでいるのを見つけ、昼食をいっしょにしようと誘いに行こうとして、半ばおどけて「僕はblueの服を着た方がいいな」と述べている箇所である。これは市電の車掌の制服の色を示している。¹⁷⁾ EarlがAilieと2人でデートしている時、彼が以前に市電の車掌だったことをAilieが知っていたので不思議に思ったことがあったが、その経験とこの色彩は結び付いている。Ailieが興味を持ったと考えられるblueの服を着ることによって、今誘いに行こうとしている女の子も、Ailieと同じように自分に関心を持ってくれるかもしれないというEarlの希望がこの色彩に込められている。

- (6) "Say, did you see what I saw getting on the train?" he asked me after a while. "Two wonderful janes, all alone. What do you say we mosey into the next car and ask them to lunch? I'll take the one in blue." (250)

GreenはEarlがAilieとデートしている時に身につけていた帽子の色であり、その帽子は前衛的な羽飾りも付いている派手な代物であった。その時の彼のスーツもスリットやモールが付いており、Ailieの気を引こうとしている姿勢が伺われる。Ailieの回りにいる男性に対する嫉妬をこの色彩は示唆し、彼の欲求不満の現れとみることができるだろう。

- (7) Exteriorly Earl had about everything wrong with him that could be imagined. His hat was green, with a radical feather; his suit was slashed and braided in a grotesque fashion that national advertising and the movies have put an end to. (249)

RedはAilieが取り乱し、興奮して何時間も泣いていたみたいに目の縁が充血している様子を表すのに使用されている。

BrownはEarlの目の色に現れ、Ailieとの実りのない愛が象徴されているように思える。

Blackは同じくEarlの髪の色を示し、目の色と共に不吉さと結び付いている。

OrangeはAilieの屋敷の戸口からもれている照明の色として用いられ、彼女の情欲、結婚願望、さらに利己心を暗示しながら、¹⁸⁾ whiteの服を着た彼女の容姿を引き立てるのに効果的な役目を果たしている。

この短編における色彩語の頻度は次のようになっている。

white 5/ pink 2/ blue 1/ green 1/ red 1/ brown 1/ black 1/ orange 1

〔3〕

‘The Rough Crossing’¹⁹⁾ では名士である劇作家 Adrian Smith (31歳) と彼の妻 Eva (26歳) が New York を子供たちと乳母を連れて、日曜日の夜、船でフランスに向けて出発しようとしているところから物語は始まる。夫妻はお互いを信頼し、仲睦まじく行動して似合いのカップルであった。²⁰⁾ 船は火曜日に暴風雨の圏内に近付き、水曜日の夜遅く暴風雨圏に入ることになるのであった。火曜日の午後夫妻は初めて船の満員盛況のバーに顔を出し、Adrian は近くのテーブルにいる美人の Elizabeth D’Amido 嬢に目を奪われる。やがて彼女を含むデッキテニスのグループ (3人の青年と2人の娘) の中から1人の Stacomb という青年が夫妻のところに来て、1杯やりながらいっしょに話をしたいと申し入れてきた。Adrian はそのグループの1人 D’Amido 嬢と言葉をかわすうちに、彼女に心を引かれて楽しい気分になってくる。30分後、Eva は子供たちの様子を見て船室に戻るが、ドアを開けると、給士がベッドにぐったりとして腰を降ろしているのにでくわす。彼は盲腸炎にかかっていることがあとでわかり、船上で手術を受けることになるのである。他の人の手を借りて、やっと部屋からその給士に出て行ってもらったあと、Adrian が船室に戻って来る。船は揺れ始め、Eva は気分が悪くなり晩御飯も断わりベッドに横になっていることにする。Adrian の方は、例の若い連中と船上でのテニスのトーナメント試合出場について雑談し、楽しく過していた。翌日のテニス試合で Adrian と D’Amido 嬢が組になって優勝し、そのあとバーで1杯やり、2人の仲はいよいよ親密になっていく。一方、Eva も誘われるままシャンパンを傾け、Butterworth という青年と意気投合していく。²¹⁾ Eva は Adrian と D’Amido 嬢の関係に気付き、いやみな言葉を Adrian に述べたり、シャンパンの酔いに任せて、自暴自棄になっていく。²²⁾ 彼女のこの時の様子は嵐がいよいよひどくなり、船が大揺れになっていくのと時を同じくしている。翌日の昼頃、Adrian が目覚めると、Eva もそばに横たわっており、二日酔いで頭を押えながら片目をあげ死にそうな形相である。医者を呼んでもその医者は昨夜の Eva の泥酔状態を Adrian に報告し、なじるだけで、本気になって彼女を診察しようとはしない。最後に医者は盲腸炎にかかっていた給士が今朝息を引き取ったことを告げ、あとで鎮静剤を届けさせると言って部屋を出て行く。代りに Butterworth 青年が入って来て、Eva にあれこれと世話を焼くが、Adrian は不快になり彼を無理に追い出す。Eva は Adrian と離婚をしたいと口走ったりするようになるが、Adrian に説得され、子供の顔を見て乳母がいる船室に出かけると言って Adrian の許を去る。しかし20分経っても戻って来ないので、Adrian は Eva を探しに出かける。船は揺れ、海水が船を叩き付け、甲板を歩くことは困難であったが、よろけながら Eva を求めてうろつき回る。やがて通風筒の横にいる彼女に気付いて、必死になって彼女をつかまえに行くが、甲板を流れる海水に足を取られ、2人とも甲板に転がり、死に物狂いで船内に辿り着くのである。ここには2人の人生における苦闘が嵐と二重写しになっている。²³⁾ 2日後、Adrian と Eva は臨港列車に乗ってパリーに向かっていった。数日前の2人の行動はまるで夢幻であったかのように、再び仲睦まじいかつての夫妻に戻り、信じられぬ悪夢だったね、とお互いを慰め合うのである。²⁴⁾

この短編で blak は船を襲う嵐や、風によって運ばれる海水、水しぶきと結び付き、恐ろしさを象徴している。

(8) The deck was dark and drenched with wind and rain. The ship pounded through

valleys, fleeing from black mountains of water that roared toward it. (265)

Yellowは波止場にともる明かりの色として用いられ、船が出帆する夜のしじまに明るさを投げ掛けている。しかしこの明かりを見詰めるSmith夫妻には、お互いの浮気心を嫉妬し疑う気持ちがやがて芽ばえる前兆にもなっている。²⁵⁾

(9) . . . the boat was just a piece accidentally split off from it; then the faces became remote, voiceless, and the pier was one among many yellow blurs along the water front. Now the harbor flowed swiftly toward the sea. (256)

Whiteは暗黒の嵐の中、船に打ち寄せる波が、船の明かりで白く光っているのに使用されている。またAdrianがD'Amido嬢らとデッキテニスの後、飲み騒いでいるのに、Evaは気分が悪くデッキに1人残され、物思いにふけて、「ブルターニュの小さなヴィラに住むこと」と「子供にフランス語を習わせること」の2つの言葉を何度も繰り返すことになるが、²⁶⁾ その言葉は嵐で頭上に広がった曇り空²⁷⁾のようにむなしく意味のないものになってしまう。この時にEvaが目にした“the wide white sky” (261)は夫の冷たい心²⁸⁾を暗示し、彼女の空虚な孤独感が込められているように思える。

RedはD'Amido嬢が船上での仮装パーティーのため、エレベーターボーイから借りたpea-jacketの色として用いられている。人の注意を引く色彩であり、特にAdrianに注目してほしい気持の現れである。

Greenは盲腸炎をわずらっている給士の青白い顔の色として用いられ、不吉さを暗示している。まもなく彼は死を迎え、海中に葬られることになるのである。

(10) Still the man (=the cabin steward) didn't move. She perceived then that his face was green. (258)

この短編における色彩語の頻度は次のようになっている。

black 3/ yellow 2/ white 2/ red 1/ green 1

[4]

‘The Bridal Party’²⁹⁾の主人公Michael Curly³⁰⁾は2年間付き合っていたCaroline DandyからHamilton Rutherford³¹⁾と婚約し、Michaelが住むパリーで近々結婚するという手紙を6月初めに受け取った。Carolineの母が病気でパリーの療養所に入っており、一族みんながパリーに集まるというのである。MichaelがCarolineに初めて会ったのは、彼女がNew Yorkの社交会にお目見えした17歳の時で、当時彼は彼女の心を独占していたが、やがて彼女は彼には金が全く無く、またそれを稼ぐ能力もないことを知り、徐々に彼のことを無為の存在とみるようになっていった。しかしMichaelの方は彼女への思いが断ち切れず、ここパリーに来て8ヵ月たっても、いつか彼女が誠意を持って彼の許へ戻って来てくれると淡い望みを抱いていた。ところが今度の手紙で、彼は彼女を永遠に失ったことを思い知らされるのである。丁度この時、Michaelは祖父が亡くな

り25万ドルの遺産が入って来る電報を受け取る。お金が手に入ることによって、自信を回復した彼はCarolineが自分のものにならないのなら、少なくとも、自分の好ましい印象を彼女の胸に刻み付けてHamiltonと結婚するようにさせてやろうと心に誓うのである。³²⁾

HamiltonはMichaelほど美男子ではないが、生气あふれる魅力、証券関係の仕事による自信とそれによって生ずる貫禄を持ち合わせていた。結婚前に友達がいくつかのパーティーを催してくれることになり、Michaelも友達の1人として招待を受けていた。Chez Victorでのパーティーでは彼は50がらみのHamiltonの父親に会ったり、Carolineと踊ったりするが、気分が塞がっていくのはどうしようもなかった。Jebby Westのところでのお茶の会に行っても、Carolineと2人きりになって話す機会はなく失望する。MichaelはHamiltonと二人だけで話す時間を持つが、女性に対して抱く考え方が全く違う二人は意見のかみ合わないまま別れる。さらに、HamiltonがRitzホテルで主催する、男性だけの独身お別れ晩餐会に招かれたMichaelは、新調したディナー・ジャケットとシルクハットを身に着けて、金持気分で出席する。そこではHamiltonに対する悪ふざけをJohnsonを中心とするまわりの男性が計画していた。あるフランス娘を雇って、本物の赤ん坊を抱いて来させ、彼女に「ハミルトン、今さら私を捨てるなんてひどいわ」と言わせようという趣向であった。ところが、会場にはもう一人女性が来ており、Hamiltonに会わせてほしいという。名前はMarjorie Collinsといい、かつてHamiltonが付き合っていた女性であった。MichaelはRitzホテルを他の者に気付かれないように出て、Carolineがいるホテルに出かけて行く。Hamiltonに関する悪い知らせを彼女に知らせるつもりではなかったが、CarolineがHamiltonの女性のことで落胆した時に、いっしょにいてやりたいと思ったのである。Michaelは彼女に対する自分の思いの丈をぞんぶんに話し、彼女の方もそれを聞いて声を細めて泣き出したが、丁度その時、Hamiltonが二人のところにあわてた様子でやって来て、例の突然現れた女が脅迫する様子を見せたので、警察を呼んですぐに解決してもらったとCarolineに話す。³³⁾ またHamiltonは自分宛に来ていた二通の電報によって、彼が完全な文無しになってしまったことも彼女に話したが、彼に対する彼女の気持は変わらず、最初からやり直そうと、彼は逆に励まされる。³⁴⁾ Michaelはこの話を聞いていて、Carolineの心が自分から完全に離れてしまったことを実感するのである。

小さな教会での結婚式後、参加者は三々五々、ジョージ5世ホテルでの披露宴に出席するため、ぶらぶら歩いてそちらに進んでいる。やがてそのホテルのバーで宴会が始まり、記念写真が何度も撮られ、シャンパンの洪水の中で時間が過ぎていく。MichaelはCarolineへの思いも、またHamiltonへの敵対心もすっかり心から洗い流されて、新たな人生へと足を踏み入れようとする。³⁵⁾

この短編でblueはMichaelがCarolineのことを考えて眠られず、夜明けを迎える場面ですぐ用いられている。夜明けの光で家具の隅々がblueに彩られているが、Carolineを自分のものにすることができなかったMichaelの無念さが象徴されているように見える。この色彩はCarolineのドレスの色にも使用されており、Michaelにとっては憂うつな色調を帯びた色彩となっている。凶色のイメージとしては、Hamilton宛に来たもので、Carolineが預っていた二通の電報の色彩として現れている。株の暴落による仕事の失敗を伝える電報で、Hamiltonには凶報なのであった。

(11) Presently she appeared in a dinner gown, holding two blue telegrams in her hand.

They sat down in armchairs in the deserted lobby.(280)

WhiteはCarolineが結婚する日の前の晩、一睡もできずに朝を迎え、頭がふらふらしているMichaelの不健康な顔色を描写するのに用いられていると同時に、結婚式当日のCarolineの波打つドレスの色を表し、清浄、純真を暗示している。この彼女の姿を見て、Michaelも今までの苦い思い出が消え失せ、新しい人生へと乗り出す切っ掛けとなるのである。

- (12) He (= Michael) saw Rutherford near her (= Caroline), looking at her as if he could never look long enough, and as Michael watched them they seemed to recede . . . , so that now he could scarcely see them, as if they were shrouded in something as misty as her white, billowing dress.(286)

GrayはCarolineの目の色に使われており、Michaelへの愛情はまだ残されていたが、結局Hamiltonとの結婚へと向かう彼女の不安定ではっきりしない気持が暗示されている。そしてそのHamiltonの目にもこの色彩が用いられており、株の投機で毎日を過ごす不安定な人生が垣間見られる。

- (13) His combative eyes, meeting Michael's, flickered with a gray light.(278)

YellowはCarlineの髪の色に用いられ、金がなく、将来性もないようにみえるMichaelとは結婚生活をやっていけないと直観する彼女の臆病な心が反映されている。

この短編における色彩語の頻度は次のようになっている。

blue 3/ white 2/ gray 2/ yellow 1

〔5〕

'Two Wrongs'³⁶⁾ に登場する主人公Bill McChesney³⁷⁾ は演劇関係のプロデューサーをしているハンサムな26歳の青年である。ここ3年ばかりはNew Yorkで興行が当たって、自信たっぷりな有名人になっていた。ある日、彼が事務所で同僚のBrancusiと雑談をしているところに18歳の赤毛の娘Emmy Pinkardが劇作家Alan Rogersの推薦の手紙を持ってBillに面会を求めてくる。彼女はBillが演出する芝居のどれかに出たいというのである。彼は彼女と昼食を食べるために行きつけのBedfordというレストランに行き、お互いに身の上話を始める。Billは彼女のストッキングにとこところ穴があいているのを見つけ、なんとなく親近感を覚え、やさしい心持ちになっていった。彼女は将来ロシア・パレーのパレリーナになりたい願望を持っていた。Billは女優のIrene Rikkerと婚約していたが、Emmyと話をしているうちに彼女に興味を持ち、ある劇のパーティー場面に出演する仕事を彼女に準備してやる。BillとIreneの関係は、最近ではお互いに飽きがきており、破局も近い様子であった。このような状況になったのはIreneの相手役である美貌の俳優Frank Llewellenの存在が一原因でもあった。ある時、IreneとFrankが共演する芝居の練習中にBillが文句をつけたことから、FrankになぐられたBillが客席にぶっ倒れるという出来事が起る。Billはなんとかその場をつくろって練習を終える。この事件を契機に、Billは自

分に同情してくれた Emmy に好意を持ち、芝居公演の終わった後、突然 2 人は Connecticut 州で結婚することになる。

やがて Bill は同僚と喧嘩したこともあって London で興行をすることになり、その町の公爵や貴婦人たちと付き合い始める。貴婦人の一人 Sybil Combrinck と仲よくなるが、お高くとまる彼女によって、Bill と言えども最後には見下されて、パーティーにも招待されず不快な気持を彼は味わう。無理にパーティー会場に押しかけて行ったが二人の従僕に会場から追い払われ、さらにみじめな気分を経験するだけであった。それを紛らすために彼は酒を浴びるほど飲み、泥酔状態にまでなる。³⁸⁾ タクシーでやっと我が家に着くと、病院から電話があり、妻 Emmy が赤ん坊を死産したことを知り、あわてて病院に駆け付ける。Emmy は病院の入口で、タクシーから 1 人で降りようとして転んだというのである。彼女は自分から彼が離れてしまったように感じたが、一方では彼を哀れだとも思っていた。心身が回復した Emmy は昔の夢を実現しようと New York に戻って、26 歳でバレエの稽古を始める。Bill のショー・ビジネスの仕事は、今では競争が激しくなり、彼は無理を重ねた生活により、左肺を冒され咯血するようになる。³⁹⁾ 医者の話では、空気の良い暖かい所に行って静養するよにということであった。彼女の方は Bill の力添えもあり、バレー・スクールに通い、やがてメトロポリタン・オペラ劇場で踊らないかという話も出てくる。静養のため Bill といっしょに西部へ同行しようという Emmy を留まるように説得し、子供の Billy とともに New York に残して、Bill は 1 人で列車に乗り込む。Emmy の成功を願い、今までの自分の行動を反省しながら、彼女が最後にはどんなに良い契約があっても、自分の所に来てくれるだろうと思って Bill は心がなごむのであった。

この短編では、red は Emmy の髪の色に用いられ、貧しい境遇にもかかわらず、自分の願望を果そうと全力を尽すエネルギーが彼女には感じられる。

- (14) She (= Emmy) was very young, with beautiful red hair, and more character in her face than her chatter would indicate; it did not occur to Mr. Brancusi that this was due to her origin in Delaney, South Carolina.(288)

White は Bill と Frank が喧嘩をし、Bill がなぐり倒された時に、ある演劇作家が Bill を助け起こしたが、その時の作家の恐怖で真っ青になった顔を描写するのに使用されている。

- (15) There was a moment's wild confusion, then people holding Llewellen, then the author, with a white face, pulling Bill up, and the stage manager crying: "Shall I kill him, chief? Shall I break his fat face?" and Llewellen panting and Irene Rikker frightened.(292)

Gray は Bill が Frank と喧嘩をした後、興行を中断せずに辛抱して、なんとか終演まで漕ぎ着けるそのつらい日々を修飾するのに用いられている。この色彩は深酒に気を紛らせている、苦悩に満ちた彼の毎日を象徴している。

- (16) After a good run it closed just as he was drinking too much and needed someone

on the gray days of reaction. They (=Bill and Emmy) were married suddenly in Connecticut, early in June.(293-294)

さらにEmmyがバレエ・スクールに通うのに使っているカバンの色としてもこの色彩は用いられている。Emmyは自分が希望するバレエをBillに練習させてもらっているが、やがてそのBillが肺病に罹るという不運に巡り会う。彼女の侘びしく、寂しい未来がこの色彩によって暗示されている。

BlackはBillが酒の酔いを醒ましたり、タバコを控えるためのcoffeeを修飾するのに用いられている。

この短編における色彩語の頻度は次のようになっている。

red 3/ gray 2/ white 1/ black 1

ここで扱った5つの短編の主な色彩については次のようにまとめることができる。

Whiteは明るさ、上品さ、純真さを表すと共に青ざめた不健康な顔、孤独感、冷たい心を暗示している。Blueは憂うつさ、無念さのほかに奉仕の精神や恋愛に対する希望を象徴している。Pinkは健康な肌、女らしさ、おしゃれを示唆すると同時に安っぽさの概念も持つ。Greenはしつと、ねたみ、不健康な顔を表し、redはエネルギー、興奮、目立つことと結び付いている。Grayは不安定な人生[気持]、苦悩、侘しさと関連がある。Blackは恐ろしさ、悲哀、不吉を象徴し、brownは実りのない愛、心の不毛性を示している。

<Notes>

- 1) 小林資忠「F. Scott Fitzgeraldの短編にみられる色彩表現について(Ⅲ)」(『愛媛大学教育学部紀要 第Ⅱ部人文・社会科学』第24巻 第2号, 1992, 2月, pp.87-99)を参照されたい。
- 2) He is “an actor who attracts women without effort or design.” ____Robert A. Martin, “Hollywood in Fitzgerald: After Paradise”, in *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: New Approaches in Criticism* edited by Jackson R. Bryer (Madison, Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 1982), p.141.
- 3) Although he is characterized as a “romantic man,” there is enough of the straightforward, confident, realistic man to handle successfully his wife’s sentimental notions about Arthur Busch, Margaret’s blackmail attempt, the blatant overtures by Dolores the domestic, and insure a relatively happy ending. ____ James J. Martine, “Rich Boys and Rich Men: ‘The Bridal Party’” in Jackson R. Bryer, *ibid.*, pp.263-264.
- 4) George Hannaford, a handsome actor, feels himself becoming exhausted by the contradictory demands being made on him by Helen Avery, a beautiful young actress who wants him to return her love; by Kay Tompkins, his wife who feels that their marriage is being tested; by Margaret Donovan, a studio employee who is willing to blackmail him to win his attention; even by the Mexican maid, whose strategies are also aimed at “a possible admission to the thousand delights and wonders that only he knew and could command.” __Richard Lehan, “The Romantic Self and the Uses of Place in the Stories of F. Scott Fitzgerald” in Jackson R. Bryer, *ibid.*, p.20.
- 5) Many of Fitzgerald’s first impressions of Hollywood appear in this story, and as George struggles to keep his marriage intact by fending off the unwanted attentions of several women, we see what Fitzgerald as

- novelist would have seen through intensely detailed scenes describing Hollywood and the movie studios. ___Robert A. Martin, *op. cit.*, p.141.
- 6) It (=“The Last of the Belles”) tells the story of a beautiful Southern girl, Ailie Calhoun—how she is gradually transformed from a Southern belle of the old-fashioned type into a flapper of the later Jazz Age. … More important still, it is the history of one man’s dreams, of the narrator’s growing nostalgia for the lost romance of his youth. ___Brian Way, *F. Scott Fitzgerald and the Art of Social Fiction* (London: Edward Arnold Ltd.,1980), p.82.
- 7) Fitzgerald’s initial presentation of Ailie makes her seem so bewitching that most readers seem not to recognize the falling away of her mask, the revelation of the chill-minded flapper under the alluring Southern belle. ___Alice Hall Petry, *Fitzgerald’s Craft of Short Fiction: The Collected Stories 1920–1935* (Ann Arbor, Michigan: UMI Research Press, 1989), p.156.
- 8) Like Gatsby, Earl Schoen is Nobody from Nowhere, the equivalent of being a streetcar conductor from the milltown of New Bedford, Massachusetts. What he lacks in intelligence, education, and social graces is made up for by his good looks and his impressive officer’s uniform. ___Richard Lehan, *op.cit.*, p.13.
- 9) Popular notions of the romance of war lead Ailie Calhoun of “The Last of the Belles” to be smitten by Earl Schoen, whose background as a boorish streetcar conductor is well-concealed behind a dashing uniform. ___Alice Hall Petry, *op. cit.* p.158.
- 10) The narrator recalls how, when he first went to the South, he still believed in the romance of youth and war. In both he was disappointed—he did not find love, and he was never sent on combat duty overseas—and yet, with the passage of time, the South and Ailie herself have come to seem the most significant elements in his experience of life. ___Brian Way, *op. cit.*, p.83.
- 11) Her firm sense of her position, her power and her aims (reflected in the care with which she chooses her beaux) implies a great social stability. ___Brian Way, *ibid.*, p.82.
- 12) … by the late 1920s, Fitzgerald was becoming more interested in nostalgia as a fictional subject. Of the group of stories which reflect this concern, “The Last of the Belles” is very much the best. ___Brian Way, *ibid.*, p.82.
- 13) この短編では *The Last Tycoon* にみられるのと同じように、南部と過去が一体となって融合し若さや戦争によって生じる romance の雰囲気を高めている。
Often it (=the South) epitomizes for him (=Fitzgerald) glamour and romance, as it does for the narrator of “The Last of the Belles,” who asserts: “I suppose poetry is a Northern man’s dream of the South.” But it often also represents sloth, inertia, failure—a place where once-grand houses are “yielding to poverty, rot and rain” and where shops seem “only yawning their doors and blinking their windows before retiring into a state of utter coma.” ___Robert Roulston, “Whistling ‘Dixie’ in Encino: *The Last Tycoon* and Fitzgerald’s Two Souths” in *F. Scott Fitzgerald* edited by Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1985), p.158.
- 14) He discovers, too, that the Ailie he meets is not the Ailie he remembers: even so, he proposes to her half-heartedly, but she, not surprisingly, turns him down. ___Brian Way, *op. cit.*, p.83.
- 15) Something precious but irrecoverable has been lost. The demands that the North, a type of reality, will make of them, will render the South the stuff that dreams are made on, the dreams of vanished youth. ___C. Hugh Holman, “Fitzgerald’s Changes on the Southern Belle: The Tarleton Trilogy” in Jackson R.

- Bryer, *op. cit.*, p.61.
- 16) The problem at the end of "The Last of the Belles" is not that the protagonist goes back to Tarleton and loses one whom he realizes he has loved; it is rather that in going back, he knows that she and all she represents has already been lost through the passage of time itself. It was not Ailie who tore down the camp and rusted the tomato cans; it was time, and the Southern belle has her greatest value as a symbol of that time arrested in the emotions. For Scott Fitzgerald she had a potent aura, one which he made his readers feel. The Southern belle, at least in Tarleton, was wistful nostalgia made flesh. ___C. Hugh Holman, *ibid.*, p.64.
- 17) She (=Ailie) laughingly complains that he behaves like a street-car conductor, but the uniform he wears makes him an officer and gentleman—even an admissible suitor perhaps. ___Brian Way, *op. cit.*, p.83.
- 18) 山下圭一郎ほか共訳『イメージ・シンボル事典』(東京:大修館書店,1984), p.472.
- 19) An uncertain destiny, both exciting and menacing, awaits the travellers, and it soon becomes clear that Fitzgerald is presenting the ship as a microcosm of the Jazz Age. ... Like the *Titanic* a generation earlier, Fitzgerald's ship becomes an image of an arrogant and doomed civilization. ___Brian Way, *op. cit.*, pp.88-89.
- 20) Fitzgerald's couples are past the flush of first love, finding all too frequently that their self-indulgence and superficial values have diminished not only them but their marriages as well. ___Ruth Prigozy, "Fitzgerald's Short Stories and the Depression: An Artistic Crisis" in Jackson R. Bryer, *op. cit.*, p.115.
- 21) Adrian becomes infatuated with the beautiful Betsy D'Amido, and Eva, only partly out of revenge, encourages the attentions of a fatuous young man called Butterworth. ___Brian way, *op. cit.*, p. 89.
- 22) ... in "The Rough Crossing," the complete deterioration of Adrian and Eva Smith's marriage is reflected in the gale outside, which grows into a storm that bursts upon the ship with a fury equal to the intensity of Eva's despair. ___Ruth Prigozy, *op. cit.*, p.113.
- 23) The disorder caused by the storm is barely distinguishable from the chaos of their lives. ___Brian Way, *op. cit.*, p.89.
- 24) But for the reader, their marriage now seems a somewhat precarious affair, and their renewed determination that, in Paris, they will see no one, and live only for each other, has a hollow ring. ___Brian Way, *ibid.*, p.89.
- 25) 山下, 前掲書, p.705.
- 26) Eva tries desperately to recapture the idyllic early years of marriage. ___Ruth Prigozy, *op.cit.*, p.114.
- 27) 赤池鉄士『英語色彩の文化誌』(東京:研究社,1981), p.161.
- 28) 山下, 前掲書, p.687.
- 29) In "The Bridal Party" he (=the hero) resigns himself to the loss after being forced to recognize the moral superiority of the rich man she has married. ___Malcolm Cowley, "Fitzgerald: The Romance of Money" in Harold Bloom, *op. cit.*, p.69.
- 30) Curly is the romantic who believes that it is money that makes the very rich different and a man successful. Curly, like so many heroes in Fitzgerald, loved a young girl and then lost her—lost her, he believes, because he had no money. His loving and losing Caroline Dandy leaves him with the fear that he will never be happy. ___James J. Martine, *op. cit.*, p.264.
- 31) Though Rutherford is not as handsome or—suddenly—as rich as Curly, he remains vitally attractive

- because of his very confidence and authoritative bearing which are evident throughout the story. ... Rutherford is no dreamer—of wealth or of women. ... He is calm, cool, and, yes, rich—and the fact of his having or not having money seems almost accidental to his wealth. ___James J. Martine, *ibid.*, pp.264- 265.
- 32) On the brink of Caroline’s marriage, Michael comes into an inheritance and determines to take up his courtship once again. This effort fails, though not for lack of resources. ___Scott Donaldson, “Money and Marriage in Fitzgerald’s Stories” in Jackson R. Bryer, *op. cit.*, p.86.
- 33) He (=Rutherford) is no romantic, and the attempt by Marjorie Collins to blackmail him is handled in a cool rational manner, almost coldly, and finally most effectively. ___James J. Martine, *op. cit.*, p.264.
- 34) Caroline preferred Rutherford for his solidity and decisiveness, she tells Michael. ... And she proves the point by sticking with Rutherford when he discovers, on the night of his stag party, that he has lost every cent he’s made and must start over. ___Scott Donaldson, *op. cit.*, p.86.
- 35) For eventually, “The Bridal Party” must be seen as an initiation story, the initiation of Michael Curly. He has grown not just rich but, by the story’s conclusion, toward an awareness; suddenly it seems that the loss of the romantic notion is a condition necessary for the Fitzgerald male to grow. It is as though this tyro Michael Curly has learned something from the tutor Hamilton Rutherford. ___James J. Martine, *op. cit.*, p.267.
- 36) For various reasons, “Two Wrongs” is not quite successful, but the primary one is that Fitzgerald tries too desperately to build a case for the rightness, the selflessness of Bill’s final act and, concomitantly, for the wrongness, the selfishness of Emmy’s. True, the unappealing aspects of the self-portrait as Bill McChesney betoken Fitzgerald’s growing awareness of his role in the problems of his marriage, but as the very title of the story suggests, he refuses to believe that it is all his fault. Bill clearly feels that he should have been with Emmy when she slipped getting out of a taxi at the hospital and lost their baby, but he also clearly feels that she should have decided to abandon her ballet career when Bill’s tuberculosis recurred: their two wrongs do not make a right, in the opinion of Fitzgerald/McChesney. ___Alice Hall Petry, *op. cit.*, pp.188- 189.
- 37) “Two Wrongs” melodramatically shows his (=Fitzgerald’s) fictional counterpart, Bill McChesney, selflessly exiling himself to Denver so that his talented Southern wife can pursue a belated career as a ballerina. ___Alice Hall Petry, *ibid.*, pp.147- 148.
- 38) Drinking is not really central to McChesney’s malaise, nor does it figure prominently in the story except as part of the contrived incident which precipitates his decline. McChesney’s insecurities and aggressiveness are made ugly by drinking, and Fitzgerald can again do penance through that display. ___Kenneth E. Eble, “Touches of Disaster: Alcoholism and Mental Illness in Fitzgerald’s Short Stories” in Jackson R. Bryer (ed.), *op. cit.*, p.44.
- 39) The diagnosed tuberculosis is not used to excuse McChesney’s behavior nor even to explain his loss of vitality. It chiefly serves to emphasize his uneasy dependence on Emmy (she has enjoyed great success as a ballet dancer) and as a device of plot enabling him to leave Europe and Emmy and accomplish his decline alone in the West. ___Kenneth E. Eble, *ibid.*, p.44.

〈References〉

- 1) Akaike, Tetsushi (赤池鉄士). 『英語色彩の文化誌』 (東京: 研究社, 1981).

- 2) Cowley, Malcolm. "Fitzgerald: The Romance of Money" in *F. Scott Fitzgerald* edited by Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1985).
- 3) Donaldson, Scott. "Money and Marriage in Fitzgerald's Stories" in *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: New Approaches in Criticism* edited by Jackson R. Bryer (Madison, Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 1982).
- 4) Eble, Kenneth E. "Touches of Disaster: Alcoholism and Mental Illness in Fitzgerald's Short Stories" in Jackson R. Bryer (ed.), *ibid.*
- 5) Holman, C. Hugh. "Fitzgerald's Changes on the Southern Belle: The Tarleton Trilogy" in Jackson R. Bryer (ed.), *ibid.*
- 6) Lehan, Richard. "The Romantic Self and the Uses of Place in the Stories of F. Scott Fitzgerald" in Jackson R. Bryer (ed.), *ibid.*
- 7) Martin, Robert A. "Hollywood in Fitzgerald: After Paradise" in Jackson R. Bryer (ed.), *ibid.*
- 8) Martine, James J. "Rich Boys and Rich Men: 'The Bridal Party'" in Jackson R. Bryer (ed.), *ibid.*
- 9) Petry, Alice Hall. *Fitzgerald's Craft of Short Fiction: The Collected Stories 1920-1935* (Ann Arbor, Michigan: UMI Research Press, 1989).
- 10) Prigozy, Ruth. "Fitzgerald's Short Stories and the Depression: An Artistic Crisis" in Jackson R. Bryer (ed.), *op. cit.*
- 11) Roulston, Robert. "Whistling 'Dixie' in Encino: *The Last Tycoon* and Fitzgerald's Two Souths" in Harold Bloom (ed.), *op. cit.*
- 12) Way, Brian. *F. Scott Fitzgerald and the Art of Social Fiction* (London: Edward Arnold Ltd., 1980).
- 13) Yamashita, Kazuichiro (山下圭一郎) *et al.* (trans.), 『イメージ・シンボル事典』(東京:大修館書店, 1984).

(1992年 10月12日受理)